

3. 調査項目

フィールドワーク参加前後に質問紙調査を実施した。

フィールドワークの参加前後に障害者（児）への関心、障害者（児）の気持ちの理解や良好なコミュニケーションができるか、障害者（児）の強みや健康課題、必要な支援について理解しているかといった9項目（詳細は表2に記載）について5件法（1. とてもある（できる、ある） 2. どちらかというところ（まあできる、ある） 3. どちらでもない 4. どちらかというところ（あまりできない、ない） 5. ほとんどない（できない、ない））で尋ね、全体の傾向を掴むために平均値を算出した。

自由記述の内容については、フィールドワークの参加前に志望動機、知りたいこと（学びたいこと）、障害（ダウン症候群以外を含む）がある方への関心を持つ理由の3項目に関して尋ねた。フィールドワーク参加後には、学んだこと、今回の学びを今後どう生かすか、障害（ダウン症候群以外を含む）がある方への関心を持つ理由の3項目に関して尋ねた。

4. 調査時期とフィールドワークの参加企画及び実施内容

調査時期とフィールドワークの参加企画及び実施内容を表1に記載した。フィールドワークは、ダウン症候群がある障害者（児）が必ず1名以上参加できるように企画した。また、障害が同一であっても障害者（児）

が抱える発達・生活上の課題が異なり個性があることや、ライフサイクルを見直し、各時期がつながり連続していることを対象者（参加学生）が理解できるように、各企画は研究者の指導のもと対象者が作成し、障害者（児）の発達年齢に応じた内容で実施した。さらに、対象者が把握した発達課題から障害者（児）の家族の生活課題を抽出できるように、参加企画終了後に振り返りを行う会議を実施した。

5. 倫理的配慮

本学倫理委員会（受付NO. 32-14D）の承認を得た。1回目と2回目の質問紙の回答内容を連結させるために、調査対象の学生には匿名性に配慮し本人のみが分かる同一の識別記号を両方の質問紙に記入することを求めた。また、文書にて調査への参加と調査結果の論文等での公表に同意を得た。

Ⅲ. 調査結果

対象者7名全員の回答が得られた。

1. フィールドワーク参加前後における選択式質問の回答の変化（表2）

回答結果の数値が低いほど、障害者（児）とのコミュニケーションが円滑にできる、あるいは障害者（児）の支援に必要な上述の項目を理解していることを表す。

表2 フィールドワーク参加前後における質問紙調査結果（選択式）

項目	参加前後の学生の値								参加後							
	A	B	C	D	E	F	G	平均	A	B	C	D	E	F	G	平均
1 障害(ダウン症候群以外を含む)がある方への関心 1:とてもある～5:ほとんどない	2	1	2	2	2	2	1	1.7	1	1	2	3	2	2	1	1.7
2 障害(ダウン症候群以外を含む)がある方の言葉や表情・行動から、その背景にある気持ちの理解 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	4	3	3	3	4	2	3.1	2	2	3	3	3	1	3	2.4
3 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方との適切なコミュニケーション(ノンバーバルを含む) 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	2	4	3	3	4	3	3.1	1	2	3	3	3	4	-	2.7
4 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方との良好な関係性の築きかた 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	2	3	3	3	4	4	3.1	2	2	2	-	3	2	2	2.2
5 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方のもつ強みの理解 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	1	2	2	2	2	2	2.0	1	2	2	2	1	2	2	1.7
6 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方の健康課題(発達上および生活上)のニーズの抽出 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	2	3	2	2	3	4	2.7	1	2	1	3	1	1	2	1.6
7 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方に必要なフォーマル・インフォーマルサポートの理解 1:できる(ある)～5:できない(ない)	4	2	-	3	3	4	4	3.3	2	2	2	-	2	2	5	2.5
8 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方の自己決定およびエンパワメントを促進する支援の理解 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	2	4	3	2	4	4	3.1	2	3	2	2	2	2	2	2.1
9 障害(ダウン症候群以外を含む)のある方(および家族)のQOLを向上するための支援の理解 1:できる(ある)～5:できない(ない)	3	2	3	2	2	4	4	2.9	1	2	3	2	2	2	2	2.0
9項目の平均	3.0	2.0	3.0	2.6	2.4	3.4	3.1	2.8	1.4	2.0	2.2	2.6	2.1	2.0	2.4	2.1

*「-」:無回答、平均点算出時には分母から除外した

表2を基に、フィールドワーク参加前後の調査結果(全体平均値)を比較すると、9項目中8項目で障害者(児)支援に関する理解度が高くなっていった。とりわけ、障害者(児)との良好な関係の築き方、障害者(児)の健康課題のニーズの抽出、障害者(児)の自己決定およびエンパワメントを促進する支援、QOLを向上するための支援の理解の4項目の理解度は大きく上昇していた。

2. フィールドワーク参加前に行った質問紙調査の自由記述(表3)

回答内容は表3の通りであるが、ここで回答の要約を示したい。志望動機に関して、本事業に参加した学生の所属学部が、看護学部と教育学部に分かれていたことから、それぞれの学生の専攻分野や将来の職業に関連した内容や役立つ内容を学びたいという動機が見られた。また、本人および家族の話を聞きたい、障害者(児)のライフサイクルごとの発達・生活上の課題や支援の在り方を知りたいという記述もうかがえた。次に、事業への参加を通じて知りたいこと(学びたいこと)に関する質問に対しては、これまでの大学での学修や書籍での学びでは分からなかった点の理解を深めたいという記述のほか、支援の現場における実態を知りたいといった回答があった。障害がある方への関心については、障害や特別支援教育を学んでいるからという理由のほか、自身と他者とのかかわりを構築するため、あるいはユニバーサルな社会や環境の構築のための支援を将来行いたいからといった理由も見られた。

3. フィールドワーク参加後に行った質問紙調査の自由記述(表4)

学生がフィールドワークに参加から得た学びを、以下の4点に集約する。

第1に、各施設を訪問し障害者(児)と交流する経験を積んだことで、「障害」とは何かという疑問に対し、大学の講義や書物を用いた座学のみでは理解できなかった答えを見つけたという回答が複数見られた。第2に、7名中4名が障害者(児)のライフサイクルに応じた支援の在り方について学ぶことができたという回答している。第3に、障害者(児)の家族から話を聞くことで、家族が抱える心理的葛藤や障害の受容過程の経過を理解するとともに、障害者やその家族が悩みや不安を打ち明ける場を設ける必要性を感じたという回答も見られた。第4に、「他大学の学生と関わり、異なる考え方を学び、視野を広げることができた」という意見があったことは興味深い。

次に、今回の学びを今後どのように生かすかという質問に対し、教員あるいは看護師・保健師として就職した際に、障害者(児)やその家族との円滑なコミュニケーションのために今回習得した知識を生かしたいという意見のほか、様々な施設を訪問した経験を基に多職種と連携した支援を行っていききたいとの意見が述べられた。

最後に、障害者(児)への関心を持つ理由を聞く質問の回答を分析したい。なお、フィールドワーク参加前の調査においても同じ質問を行っていることから、学生の関心がフィールドワーク参加前後でどのように変化したのかについても取り上げたい。第2回調査で回答した5名中3名は、交流を通じてダウン症候群がある人(児)の特徴や彼ら・彼女らへの接し方の理解が深まった旨を記述している。また、今までダウン症の方と関わったことがなく、ダウン症に関する知識をつけたいとフィールドワーク参加前に回答した学生(表3)は、フィールドワーク参加後(表4)では「コンソーシアムで様々なダウン症候群の方々と関わることで、障害を持つ方に対するイメージが変化し、ダウン症候群以外の障害を持つ方に対しても興味を持った」と回答している。

表3 学生のフィールドワーク参加前における質問紙調査結果（自由記述）

志望動機	知りたいこと	障害(ダウン症候群以外を含む)がある方への関心
A 大学で特別支援教育について、学んでおり、自身にとって良い経験になると考えたため。 ゼミの先生に誘われてやってみようと思ったため。	支援のノウハウ 様々な知識 特別支援教育の現場について	特別支援教育を学んで興味が湧いてきているから
B 障害について幅広く学習する中で、ADHDや自閉症については大学において学びを深めてきました。一方で、ダウン症候群について課題や現状を集中して学習する機会はこれまででなかったため自身の知識・学びを深めたいと思い参加しました。	急激退行については精神的影響によるものと考えられている程度で、原因が解明されていません。その中で、どういった支援が現場では求められているのか、また今はどういった支援をされているのかを学びたい。また、他の障害と比較したときに、どのような違いがあるかを考えていきたいです。	全ての人が同じようにできるわけではないことを、しるきっかけになったことが、大学に入って障害の存在を知ったことであり、自分と他の人の違いに興味を持ったから。
C 元々特別支援教育に興味があり、このコンソーシアムで学び、将来に活用しようと思ったから。	ダウン症候群の子どもの特徴 ダウン症候群の方、その家族の関わり方(将来、教諭になった時)	軽度発達障害の家族がいる。うまく関われない時もあるため、どうすれば良いかわかりができるか考えたいと思っているか
D 以前、ダウン症の子どもや知能の遅れがある子どもと関った時に、何の知識もなく上手く関わる事ができなかったため、発達の知識を身につけたいと思いました。	就学期以降になると医療機関の受診回数が減っていくと書いていたが、その対処法はあるのか 発達に遅れがある子どもの親が特別支援学校に行かせない場合はどうすれば良いか。	
E 将来は看護師、または特に乳児期～学童期の子どもたちに興味があり、その子たちに関わる仕事に就きたいと考えていて、実習だけでは学べない部分であるダウン症についての知識を身につけ、関りの中で感じたこと、実際に本人や家族の方などから話を聞き、今後働く上でのその方々に寄り添えるように看護・支援したいと思い、参加しました。	各発達段階における問題とライフサイクルに応じた支援方法について学びたい。また、各発達段階の生活上の特徴・強みについても知りたい。	今までダウン症を持った方と関わったことがなく興味を持ったため。また、ダウン症についての知識をつけたいと思ったため。
F 普段障害がある人に関する機会は少なく、将来看護師や保健師として、働く際に、障害がある人のケアや支援をしていきたいにこの学びを活かしたいと思ったから。	障害がある人のライフサイクル別の課題や支援のあり方について。	
G 将来、看護師、保健師として病院や地域で働くことが夢であり、ダウン症の方と関わる場面が出てくると考えられる。そのため、乳児期・幼児期・学童期・成人期にはダウン症の方ではどのような生活・発達課題があるのか知ること、それぞれの時期に必要な支援について考えることができ、実際に専門者として支援を行っていく際に活かせるため。	ダウン症候群の子どもの特徴は、本当に本に示されている通りであるのか、実際にどんな特徴があるのか一人ひとりの多様性について知りたい。ダウン症の方はそれぞれの年齢に応じてどのような支援のニーズがあり、どのような関わり方をすると良い相互交流が行えるのか学びたい。お母さんや家族にはどのような不安があり、どのような支援を求めているのかを知り、看護職として障害を持つ方や家族への情報提供や関わり方など支援をする際に重点を置くところを知りたい。	障害というのは誰にでも起こり得るものであり、障害があったとしても健常者と同じような生活ができるように一人ひとりの障害に対する悪いイメージをなくすことやハンデの部分の補うことで、誰でも暮らしやすい環境のための支援を将来行いたいと考えているため。

表4 学生のフィールドワーク参加後における質問紙調査結果 (自由記述)

学んだこと	今後どう生かすか	障害(ダウン症候群以外を含む)がある方への関心
A 大学では、学童期にあたる施設の訪問をする機会があったが、その他の発達段階にある施設を訪問する機会はなかったため、貴重な体験をすることができた。他大学の学生と関わり、異なる考え方を学び、視野を広げることができた。自分が学童期・成人期において障害を持つ方の支援に関わりたいと考えていることに気づくことができた。和歌山県内のどこに各施設があり、何をしているのか、その一例を知ることができた。	障害支援を行う福祉事業について、地域包括支援センターや相談支援事業所など他にもいろんな事業があるのを残りの大学生活で調べたい。特に、和歌山県については、具体的な場所や事業所までを確認し、周りの人に紹介できるようにしたい。	障害を持つことで社会での活動が制限される現状は変える必要がある。また、自分にとって特別支援の学習は苦痛を感じるものがなく、むしろ他者と自己の評価のズレによる自己肯定感の低さに気づかせてくれた安心を感じるものだから。
B ダウン症に関する方々やそれを取り巻く環境の現状 ダウン症に関する知識 オンライン上で資料の完成など課題を行っていくことの難しさ	特別支援学校の教員を目指しているので、現場で活かしていきたい。 オンライン上で課題等を進めるノウハウを活かしていきたい。 ダウン症やそれ以外の障害等に関する知識の習得等に活かしていきたい。	
C 支援している人の思いを知ることができた。それぞれのライフステージの課題を考えることができた。	自分が知らないことをたくさん学べた。もっと理解を深め寄り添う支援を行えるよう活かしていきたい。	
D 障害を持つ方について、ダウン症のことについて学びました。私は今までダウン症の方と関わったことがありませんでしたが、今回のコンソーシアムの研究やフィールドワークで多くのことを知ることができました。	将来、子どもと関わる仕事に就きたいので、今回の学びはとても貴重なものでした。子どもを持つ親御さんの悩みや心配事、不安、喜びなど多くのお話を聞き、子どもの成長をともに見守っていけるような保育者になりたいです。また、子どもの中に信頼関係を築いたり、安心できるような雰囲気を作ることが大切だと感じました。	障害を持つ方への配慮やサポートはとても大切だと思いますが、接し方は変わらないからです。
E それぞれの発達段階に応じた身体的特徴、仕事の様子など生涯を通した生活を学ぶことができた。また、それだけでなくダウン症候群を抱える家族の心理的葛藤、受容過程などについても学ぶことができた。さらに、実際にダウン症候群をもつ対象者と家族と関わり、ライフサイクルごとに必要な支援方法についても学ぶことができた。	今後、看護師・保健師になったときにダウン症候群をもつ対象者と家族に関わる際には、今回の学びを活かし、対象者と家族にとって必要な情報提供や多職種との連携を行い、よりよい支援につなげられるよう架け橋になりたいと思う。	今回和歌山コンソーシアムで様々なダウン症候群の方々と関わることで、障害を持つ方に対するイメージが変化し、ダウン症候群以外の障害を持つ方に対しても興味を持ったため。
F ダウン症の特徴や各ライフサイクルにおける課題について学ぶことができた。また、ダウン症児を持つ家族がどのような思いで子育てをしているかなど、ダウン症児や家族のことを全体的に捉えることができた。	継続した支援が必要となるため、今回の研究で抽出した課題を次は具体的な支援方法に繋げていく必要がある。	実際に交流を通じてダウン症の特徴や接し方などを知ることができたから。
G ダウン症では、言語表現が苦手であること、語彙数が少ないなど障害の特徴を理解した上で、コミュニケーションをとることも大切ですが、障害の枠にとらわれず、一人の人間として自然体で接することで、障害を持つ方との良好な関係づくりにつながると学びました。ダウン症だからといって健常児ができることができないとは限らず、時間をかけながらも、健常児と同じように歩行や会話など様々なことができるようになることを学んだ。また、障害を理解してくれ、暖かく受け入れてくれる場所があることで、障害を持つ方もその家族も前向きに明るく生活する姿を見ることができました。そのため、地域で生活する少しでも多くの人にその障害について知ってもらうことにより、そのような居場所をつくることや、同じ立場にいる方や悩みを抱えた方が集まる場の提供により障害者とその家族が悩みや不安を打ち明けられることのできることの大切さを学びました。	看護職として障害者と接する際に、その障害について知識を深めることで、コミュニケーション方法を工夫し、スムーズなコミュニケーションを図るなど、障害の特徴を理解した上での思いやりのある関わりを大切にしていきたいです。また、障害の特徴だけでなく、障害を1つの個性と捉えて、一人の人間として自然体で関わることで、その人自身の性格や価値観などについても理解を深めることで信頼関係を築きながらサポートしたいです。障害の枠をつくらず健常児と同じように本人が挑戦したいことはなんでも挑戦できるような場を提供できるように関わって行きたいです。また、看護職として働いていく中で、障害や病気への理解を深め、患者や障害者の思いや悩みなどを傾聴・共感し暖かい態度で接することで安心して生活することができるように関わっていくことを大切にしたいです。また、専門職による相談を受けることができる場や同じ病気や障害をもつ方との交流の場などの社会資源の情報を提供することなどにより、その人が前向きに生活を送れることができるように居場所作りも行っていきたいです。	事前学習でダウン症について学び、実際に交流することで、さらにダウン症の特徴や課題などへの理解や関心が深まったため。

IV. 考察

フィールドワークに参加した学生は様々な障害者（児）やその支援者および家族と関わり障害者（児）の発達・生活上の課題を抽出する過程を通じて、障害者（児）への関心や理解はどのように変化したのだろうか。参加前後に実施された9項目の選択式質問紙調査では、障害者（児）への関心度の数値にフィールドワークの参加前後で変化は見られなかったが、その理由は参加学生が参加前の時点で既に高い関心を有していたからと考えられる。他方で、自由記述の質問回答からは、障害があるから〇〇（たとえば歩行や会話）ができないとあきらめるのではなく訓練を続けることの重要性や、「健常者」・「障害者」という障害の有無によるカテゴリーに基づいて他者と接するのではなく一人の人間として接することの大切さを学生が学んだことがうかがえる。支援する側・される側という相互関係ではなく、障害の有無にとらわれない対等な関係での相互交流を通じて、学生が自分自身を見つめ直し成長する機会にもなったのではなからうか。先行研究においても、障害について知識的な面からの理解、実際に関わる経験を通しての体験的な理解が正しい障害理解を促すために必要であることが示唆されており⁹⁾、本報告においてもフィールドワークに参加した学生が障害者（児）の発達・生活上の課題に応じた企画をインタラクティブな場で実践した結果、障害者（児）が持つ感情やコミュニケーション等の理解が深まったと考えられる。

また、フィールドワーク参加前の調査では自身の専攻分野の学びを深めたいと回答していた学生が、フィールドワークにおいて他大学の学生と関わり、異なる考え方を学び、視野を広げることができた旨を参加後の調査で回答している。同じ市内にキャンパスが所在しているものの接する機会が少ない3大学の学生の交流が図れたこと、また、専門家の講話を通じて、教育学を専攻する学生は医学に関する知識を、看護学を専攻する学生は教育学に関する知識を得るという分野横断型の学修を行えたことから、フィールドワークへの参加意義は大きかったと考える。

最後に、フィールドワークの企画運営に携わり参加学生の支援を行った指導教員の立場から、複数の大学の学生による共同研究および学生と地域住民との協働がもたらす障害理解教育の成果と今後の発展に向けた課題について以下3点述べたい。

第1に企画が約1年間と長期にわたるため、3大学の講義や実習に配慮した上で、フィールドワーク実施日等の計画を教員が中心に立案した一方で、各企画内

容については、リーダーが中心となり学生同士で決定した。また、教員は企画が障害者（児）の各ライフサイクルの発達・生活上の課題に合った内容になっているか、感染防止対策は適切に実施されているかどうかを確認することで、学生への支援を行った。その結果、各フィールドワーク先の職員からは、好意的な意見を聞くことができた。

第2にフィールドワーク先を選定するに当たり、一人の障害者（児）が同じ地域で胎児期から成人期まで時間を過ごすことが容易にイメージできるように各施設が同一市内(概ね10km圏内)に収まるように選定し、障害者総合支援法における同一のサービス支給体制のなかで、発達・生活上の課題が見通すことができるようにした。学生の自己評価では、関心の項目以外での障害理解が深まっているが、実際に交流する日時や回数、ライフサイクルを俯瞰して個性に応じた障害理解を行う視点の深まりは十分とはいえなかった。よって、看護臨地実習や教育実習等で行われるように、実習記録用紙を用いて企画ごとの学習目標を明確化し、学習内容の省察を実施するといった工夫が必要であらう。

第3に、各学部（看護学部、教育学部）の学生の視点を尊重し、医療・保健分野からの視点や教育分野の意見が出るように促し、学生の一定の相互理解が進んだと考えられる。さらに、各大学の学生同士の学部紹介などの機会があると、それぞれの専門的な視点が深められたと考えられる。

V. 結論

フィールドワークへの参加前後に行った調査から、フィールドワークに参加した学生が、障害者（児）及び家族の理解や様々な専門職者の支援がライフサイクルに沿って展開されている意義を理解できたことが明らかになった。また、大学や年齢の壁を越えて同じ地域で学ぶ学生や地域で生活している人々の交流を深めることで、地域でのつながりが生まれたと考えられる。今回の調査結果は、学生が自身の専攻分野にとどまらず、看護、福祉、教育といった様々な関連分野を横断する形で障害児（者）支援について学んでいくことの必要性や、学外に出向き当事者から学ぶフィールドワークの重要性を示唆するものであった。さらに、卒業後に看護師や教員などの専門職に就いた際に、障害児（者）支援のための多職種連携を行っていくことの大切さを学んだ学生も少なくない。大学での学びを横断的に捉え、地域や職業といった実践でいかに活用すべきかを学生が考える機会を、今後も拡充していく必

要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。本研究は、令和2年度大学等地域貢献促進事業（学生共同プロジェクト研究）の助成を受けて実施した成果の一部です。

引用文献

- 1) 厚生統計協会編集. 厚生指針 増刊国民衛生の動向 2020/2021 東京：2019；57-59.
- 2) Sasaki A ,Sago H. Equipose of recent estimated Down syndrome live births in Japan. American Journal of Medical Genetics - Part A 2019; 179: 1815-1819.
- 3) 竹内千仙. 成人期を見据えたダウン症候群のある児への関わり. 小児保健研究 2020；79：2-9.
- 4) 同上
- 5) 神原容子, 竹内千仙, 川目裕, 他. 成人期ダウン症候群において必要とされる情報提供と家族支援のあり方. 日本遺伝カウンセリング学会誌 2019；40：101-108.
- 6) 同上
- 7) 大橋博文. ダウン症児の育ちと生活5乳幼児期の育ち. チャイルドヘルス 2020；23：25-29.
- 8) 倉石佳織, 北村澄香, 北村千章, 他. 英国Down's Syndrome Associationでの調査報告—"WorkFit"の就労支援に焦点をあてて—. 日本遺伝看護学会誌 2020；19：72-78.
- 9) 庄司和史. 大学生の障害理解学習について—「特別支援教育の理論」履修前アンケート調査より—. 信州大学人文社会科学研究 2013；7：159—173.
- 10) 同上
- 11) 村上理絵, 若松昭彦, 氏間和仁, 他. 知的障害および発達障害に対する大学生のイメージおよび意識の変化—教育学部生を対象とした授業のアンケート分析から—. 広島大学大学院教育学研究科紀要 2018；67：91—97.
- 12) 高橋咲良, 中野裕美子, 水内豊和. 障害理解をねらいとした教養科目講義を受講した大学生の知的障害者に対する意識変容. 富山発達福祉学年報 2020；11：11-17